

満州

無限の可能性に向かって挑戦

熊本県 東家嘉幸

生い立ち

昭和二年十月一日、私は熊本県下益城郡杉上村（現城南町）善町で、東家正賢の三男として出生しました。東家家は代々杉上地区の総庄屋でありました。明治の時代に入り、当時の先覚者たちは競って蚕糸業に手を出したようですが、私の祖父東家嘉政も、郡長を務めるかたわら、地元はもとより遠く群馬県内にも製糸工場を興しております。

明治から大正、昭和の初期にかけては蚕糸業の全盛

時代であり、日本の外貨獲得は一に生糸の輸出にかかっていましたようです。

祖父嘉政は蚕糸業隆盛の波に乗って蚕種製造業、製糸工場と次々に事業を拡大し、欧州大戦当時は横浜に東家商工会を設け、アメリカ、ヨーロッパへ生糸の輸出で大もうけをしたと聞いております。このころが東家一族の全盛時代ではなかったかと思われます。

第一次大戦後は一転して不況となり、わが家の場合も県外の製糸工場、貿易会社を閉鎖して生家の蚕種製造業だけを残したようでした。

私が出生したころは、地元の松岡製糸と組んで事業を継続していたようですが、親父は祖父に似ず典型的な堅物であり、したがって商売には不向きだったようです。

当時の蚕糸業界の指導者の立場にあった方たちから、親父のウソをつけぬ、また女にかけても全くの堅物であった愉快な思い出話をたくさん聞かされました。

私と長兄隆之（元熊本県庁職員）は、どちらかというところ、祖父の血を色濃く受けたタイプかと思えます。腕白がすぎて、子供のころから親を困らした記憶がいくらか残っています。喧嘩相手の友だちに怪我をさせて親父と一緒に病院までわびにいったこと、学校をさぼってみかん山に盗みに行き、つかまって学校に訴えられ、全校生徒の前で朝礼台に立たされたこと、女の先生に噛みついて泣かしたことなど……。しかし喧嘩そのものはそう強い方ではありませんでした。兄が体も大きく喧嘩も強かったので、傘の下の空元気だったのかも知れません。

次兄哲夫（学徒動員後戦病死）は親父の性格とよく似たところがあって、学術優秀、品行方正、級長でもありました。私はいつも次兄と比較されて見られ、小学校当時から強い劣等感を感じて育ちました。したがって少年の抵抗心も手伝い、勉強の方はますます遠

ざかっていったようです。当時の通信簿は甲は体操ぐらいで、あとは乙、丙ばかり、どうせしかられるならと、家へ帰り着く前に破って捨てたものでした。

祖父は昔の横浜商業の優等生だったようで、息子の不出来には心配してちよくちよく学校を訪れていました。先生は気に病む親父に対して、頭はいい方だが勉強しなためだと慰めていたようです。試験のとき白紙で出したことも何度ありました。とにかく変わり者の子供だったようです。

私の祖母は安政の生まれで、旧白旗村の津志田から嫁いできていましたが、今でいうインテリで、漢文書を読んでは楽しんでいたほどです。母は私が二歳の年に亡くなりましたが、出身は益城郡大島村（現嘉島町）下仲間でした。大柄の男まさりで、当時の生家の商売やお客の接待など一人で切り回していたと聞いています。

実母の死後、現在の母がまいります三年間は祖母に育てられたせいとか、私はどちらかと申せば婆ちゃん子になったようです。祖母は外歩きが好きで、祖母の兄

弟姉妹、従兄妹が数十軒も点在していたので、子守りがてらによく連れられて歩きました。その祖母は一面厳格でもありました。特に礼儀については、私たちがうそでごま化しでもしようものなら徹底的にしごかれたものでした。その教訓はいまに至るまで私の記憶の中に生きています。

五十歳で早逝した祖父についての記憶は、私のなかに残っているものではありません。

現在の母は、私が五歳の時に二人目の母として嫁いできました。実母の顔も全くおぼえていないためか、私にとっては実母同様に優しい母でした。実母を亡くしたあと四人の兄妹が曲がりなりにも素直に育ったのは、二人目の母が何事についても控えめであったからだと言えましょう。今の母から生まれた弟妹が三人いますが、異母兄妹と思ったこともなく育ちました。

小学校六年の時、親父は旧制の私立中学へでも進学するようにすすめ、入学試験の手続きもすましていましたが、私は試験当日、友達を誘って近くの山に遊びに行き、雲がくれて試験をさぼりました。ことごと

に次兄との比較をする親父に対する、私の少年らしいささやかな抵抗だったと思います。親父は、方方探したようですが見つかるはずもなく、そのこと以来私の進学を断念したようでした。

しかし、私は進学しないことについては少しもじけることはありませんでした。言ってみれば、私は相当の変わり種であったのかも知れません。

高等小学校に進学し、二年生になった時、親父は今度は農学校へ受験することをすすめました。しかし、私は自分の意志で、満蒙開拓青少年義勇軍に入隊することを心に決めていたので、親父の意見には馬耳東風でした。親類の叔父、叔母たちまできて説得するのですが、私は内密で願書を書き、母にだけ意中を明かしてこっそり家を出ました。丁度親父が仕事で県外へ出張中でしたので、村の人たちにも内緒であり、したがって他の仲間のように部落あげての見送り風景もありませんでした。

満蒙開拓義勇軍

茨城県の内原訓練所に入隊してしまっただけからは、親

父もとうとうあきらめたらしく、自分の意思で入隊した以上最後まで頑張れ、といった意味の手紙を、ながながと墨書きしてよこしました。それは私に対する愛情のこもった便りであったことを、今に至るまで覚えております。

昭和十七年七月、私たちの部隊は下関より乗船して、満州に向かいました。隊員たちの家族が大勢見送ってくれました。

私にも、東京農大に入学して間もない次兄が駆けつけてくれました。お互いに手を握り、涙を流して別れたのが、次兄との永遠の別れになってしまいました。兄は学徒兵として満州に渡り、病死いたしました。あんなに立派な体格をしていた兄が、と信じられないほどでした。

当時の義勇軍に志願した少年は、頭が良くても進学できない者か、又は農家の二、三男かのいずれかであったようです。私の隊は第五回生であり、熊本、鹿児島両県出身者による中隊でした。

私たちが配置された訓練所は、小興安嶺下の、北安

省海倫で、その海倫駅より歩いて数十里の、全く辺鄙な、隣の訓練所まで何里もある奥地でした。私たちの中隊は全国から集まった中隊の中でも元氣者が多く、そのために問題を起こしてはならないという配慮もあって、普通大訓練所に十数隊、中訓練所は数隊が一緒に入るところを、全満州でも数少ない独立中隊として配備されました。そのために先輩からしごかれることはありませんでしたが、同僚間の喧嘩はしょっちゅう起こりました。

午前中は、軍事訓練と農作業があり、午後は、学科が大半でした。冬になると兎の糞かけをして一夜に何匹も獲ったことがありました。

少年らしいいたずらで、満州人の部落に食糧を盗みに行ったこともありました。休日には十数里もある町に出て、満州人の食堂でただ食いをしたり、露店で友達と話し合い、一人が話しかけているときに素早くポケットに品物を入れたり、ある時など死人の棺桶をあけて副葬品の装飾類を取り出すなど、随分と思ふぞけをしたものです。今思い出してみても、少年のくせに

よくもあんなことをしたものだ、汗顔百斗の思いが
いたします。植民地的にあやまった感情をもって満州
人への悲劇を与えた日本人の横暴の数々、戦後それら
被圧迫民族であった満州人が、各地で報復的な態度に
結集したのは、考えてみると積年のうっ憤が噴き出し
たことであり、当然の帰結であったとは言えましよう。

中国が統一できて国交の回復をみた今日、子供で
あったとはいえ満州の人たちに済まぬことをしたとい
う悔恨の思いで一杯であります。

私たち義勇軍の本来の目的は、満州の地に五族協和、
王道楽土を築き、あわせて満州国の守りを固めること
にありましたが、戦局が次第に悪化するに及び、私は、
中隊の中から選ばれて関東軍に入りました。昭和十九
年の四月でありました。

学徒動員で軍人になって満州に来ていた人たちの中
には、私たちの姿をみて、こんな少年まで軍隊にとら
れたのかと思う人たちがいました。

シベリア捕虜収容所

昭和二十年八月、ソ連軍の参戦、攻撃開始、全面降

伏——。日本の敗戦により、私の所属した部隊は国境
を越えてチタの捕虜収容所へ連行されました。

零下数十度の厳しい寒気と、森林伐採、搬出作業、
道路建設などの強制労働が待ちうけていました。その
間、多くの仲間が、疲労と栄養失調のために亡くなり
ました。

都会育ちの全く勤労を知らないモヤシのような兵隊
もいました。そのような人たちは強制作業の中で次々
に死んでいったのでした。

その点、満州の訓練所で、精神的にも肉体的にも鍛
えられていた義勇軍出身者は、比較的死亡率が少な
かったように思います。私は満州に渡って以来一層き
かん坊になっていたようで、捕虜収容所を転転と移動
しながらも何とか耐えることができました。

引揚げ

昭和二十三年九月上旬、ナオトカ出航、九月十三日
に、夢にまで見た郷里、熊本駅に帰り着くことができ
ました。

昭和十七年四月、熊本をたつて以来、六年半ぶりで

あり、私の青春の前半を埋めた満州、シベリアとの決別でもありました。

当時は熊本から砥用まで延びていた熊延鉄道が走っており、熊本駅から乗りかえて鯉駅で下車しました。

駅頭には部落の区長さんや婦人会長さんはじめ多くの方々が出迎えて下さいました。故里の駅に帰り着いた時の感激は、今も私の脳裏に焼き付いております。ふるさとを夜毎の夢にまで見つづけ、必ず生きて帰るのだと自らに言いきかせて耐えてきた当時の心境は、同じ境遇に身を置いた者だけが知ることのできる喜びでありましょう。満二十歳の年でありました。

実家では、私を迎えるためのご馳走がテーブル一杯に並んでいました。甘い物に飢えていた私は、いきなりおほぎに食い付きました。

シベリアでは二、三度するとなくなってしまう重湯のような粟がゆの毎日であり、空腹で眠れぬ夜など、ああ！おほぎが食いたいな！と何度つぶやいたか知れません。私はそれらのご馳走を食べながら、これは本物だろうか、夢ではないかと、ほんとに、疑ったほど

でした。

放心の日日

シベリアで生き抜くだけの三年間の生活は、帰国後虚脱した心まで抜け出てしまったような状態に私をおき、私は放心状態で三か月余りを過ごしました。今考えてみれば、二十一歳になったばかりの私にしてみれば、当然考えられる打撃だったことでしょう。

ある日、ぼかんとして座っている私に対して、祖父が言葉をかけてきました。

そろそろ、お前の進む方向を決めねばならない。ゆっくり話そうではないか。

言われたものの、私はシベリア時代の苦しみが毎日のように夢うつつに出てくる状態で、ハッとわれに返ってはあたりを見まわすありさまで、自分で将来の方向を決めることなど思いもありませんでした。

農業技術員養成所

そのころ、農業試験場に親父の義理の従弟に当る人がいて、その日、私は親父につれられて、その従弟宅を訪ねました。技術員養成所の入所試験の内容、面

接の心得など聞かされて帰り、試験当日は言われた通り一生懸命、答案用紙に向かいました。

受験生は、私より三、四歳年下の新制高等学校一回生や、中には軍隊帰りの年配者が三分の一ぐらひは混じっていました。私が入所できたのは、いくぶんかのお情けがあったのかも知れません。

おくれを取り戻すためには、人並以上勉強しなければならぬと思い、随分頑張ってみました。自分の思った通りの成果は出なかつたようです。しかし、体だけは丈夫でしたので、研究生として指導員の助手をつとめた時など、温床の踏み込みでも、馬屋の敷糞をはだしになって運び出し、ダラゴエを担って率先して実行しました。それらの行動は、私のかつての満州及びシベリアにおける体験があつたればこそ出来たのだと、今思い起こすことができます。

農家の方々が豊作貧乏に泣かされる現象は当時もすでにありました。せっかく上出来に成長した野菜を、畑に放置するような場面にも遭遇してともに泣いたこともありました。

流通機構の複雑さ、政策の貧困からくるそれらの現象は今日もなお続いております。米作の制限に続いて、今度はみかんの減反がクローズアップされてきております。それらの問題をどう解決するか。一に政治の手にゆだねられていると思います。農家のおかれている現象を誠に理解する、思い切つた政策の転換による解決が今こそ待たれている時ではないかと思ひます。

色々事情もありまして試験場を去り、経済連のお手伝いに職を得て、一年間、熊本県産、野菜の販売促進のために頑張りました。当時は八幡製鉄、筑豊炭鉱の全盛時代であり、マーケットもせいぜい北九州どまりとなつており、少しでも県産野菜が高く売れるように努力いたしました。その意欲が仇となりここも去ることになりました。

北海道へ

東京で、もう一度勉強をやり直し、再出発をしようとして、無一物のまま上京しました。再び私のどん底生活が始まりました。昼間は汗水たらして働いても、食うだけがやっつです。

勉強しようという意欲はあっても、疲労が先に立ってどうすることもできません。今のように簡単にアルバイト先が見付かるという時代ではなかったのです。

よし、どうせここまで来たのだ。今度は当分もどれぬ、北海道にでも渡ってみるか――。

片道の汽車賃と二、三日宿に泊まれる金を懐にする、上野から青森行きの列車に乗り込み、札幌駅に降り立ちました。昭和二十七年の秋でした。

ここでもニコヨンから始めました。食うだけは何とかりましたが、このままではどうにもならないという焦りもありました。

当時、札幌には、鉱業会社の社長や、東和ベニヤ工業の専務東家隆男氏など、親父の従弟がおられることを知ってはいましたが、人の情けにすがってどうするか、といった意地もあり、一方自分では精一杯努力していると思っただけでも、実際には転転と職を変える私自身が恥かしくもあつて訪ねませんでした。それでもあいさつだけはしておこうと思いたち、鉱業会社の社長宅を訪ねました。ところが東家など聞いたこともな

い、と玄関払いを食ったのです。

なにも無心にいったのではないのにと、私の胸の中には、こみあげてくる悔しさがありません。と同時に、人間としての自分の甘さ、愚かさを思い、この上は胸を張って訪ねることが出来る人間に成長することだと、自らに誓いました。この時、私が受けた仕打ちは、それからの私の人間形成に大きなプラスになったのだと、今は感謝の気持ちに変わっています。

それからしばらくたってからでした。私の祖母の妹が札幌におられるというのを聞いていましたので、昔話でも聞いてみようと思い、ふらりと訪ねてみました。一人暮らしのお婆ちゃん、なぜもっと早く訪ねてこなかったかと慰められ、遠縁に当るお婆ちゃん、情けのありがたさをしみじみとかみしめました。

お婆ちゃんは若いころ、蚕糸業の指導員として派遣され、その後、地元の人と結婚して住み付いているということでした。気丈なお婆ちゃん、私に根性について話してくれたことを覚えています。一人暮らしから一緒に住まないか、という誘いの言葉に甘えたい

気持ちもありましたが、私なりに別の面から尽くしてやろうと思ひ直し、その通り実行して大変喜んでもらいました。

また、東和ベニヤ工業の前を通りかかりましたが、懐かしさも手伝って、つい訪ねてしまいました。専務をしておられる親父の従弟東家隆男氏から、札幌へきて半年もたつてから訪ねるなんて水臭いではないかとたしなめられ、それから自分の気持ちを整理して、一週間後に、東和ベニヤ工業（社長八田昇二氏）で働くことにしました。

引き返すことはできないという覚悟がありましたので、人一倍努力し、勉強もしました。

八時出勤でしたが、六時には入社してその日の段取りを整え、一方先輩から技術を学びとるために懸命に教えを受けました。仕事に対する興味も湧いてきて、将来に対する希望もほのかに見えてきました。黙々として働きました。鋸の目立てから始まり、工夫して工場内の職場の施設も少しずつ改善していきました。合板のひとつ通りの技術をマスターするためには、三〜四

年は必要だと言われましたが、一年もすると先輩に負けない自信を得てまいりました。

当時、イギリスを始めヨーロッパ各地からの注文が殺到し、残業に次ぐ残業を続けていました。まるまる二年で、工場長に抜擢されました。この時はじめて自分にライトが当てられたということ、努力すれば必ず報われるのだという自信が湧いてきました。

ところが、それから間もなく、又しても怖ろしい試験が私の上に降りかかりました。そのころ、イギリスに大量輸出した製品にクレームが付き、社長をはじめ色を失ったのです。後でわかったことは、イギリスが不景気になって売れ行きが悪くなる。会社と契約した単価では売れないので、ケチをつけて契約を値引きさせるための物言いであったのです。会社も、将来の取引のことを考えると応ずるほかはなく、このトラブルが原因して会社は行きづまり、私が入社後、三年有余でついに倒産しました。

イギリスは紳士の国だと思われがちですが、内実は決してそうではありません。

東和ベニヤ工場の倒産直後、専務の従兄始め社員はそれぞれ退社して散って行きました。

私は八田社長さんが負債の全てを負われることを知ると、独身である私は、工場長としての責任を考えて、社長のために少しでもお手伝いしようと思いましたが、社長に進言して、原木の残りを製品とし、負債に当てることにしました。もちろん私は無給同然で働き、アルバイトをかき集めてそれから六カ月ほど働きました。

八田社長の実家は、日高地方の名門である。

奥さんの実家は、大分県内の名家稲葉家であり、今でも祖先を祭る稲葉神社が地域住民から崇拜されているという事です。奥様は宮内庁で女官をされていたころ八田家が日高の御料牧場をしておられた関係で、働める人があつて結婚されたと聞いております。

八田昇二氏は現在八十六歳の高齢ですが、私にとつては合板業界で身を立てる機会を与えて下さった人であり、かつ親身になつて仕事を教えて頂いた恩人でもあります。

現在は札幌市内で建材店を経営しておりますが、

私が総合建材メーカーになる以前から代理店をお願いしております。今でもかつての弟子である私が成長するのを楽しみに、時折熊本に足を運んでもらっています。

私も、札幌に出かけますと、今でも子供同様に教えをいただいております。

東南産業会社設立

ツキ板とベニヤによる合板は、これから発展する業種だと信じていた私は、東和ベニヤ工場が倒産して半年後、大川の家具市場を一応の拠点とみて熊本に帰ってきました。三年半振りの帰郷でした。自分の生活費を親父から無心して大川入りしたのが、私の二十八歳の年、昭和二十九年も暮に近いころでした。

札幌時代にまじめに働いたことが認められたせいか、札幌、帯広、旭川の合板業者からツキ板を送っていただけで大助かりでした。当時は時代の先端に行く商品だけによく売りました。

昭和三十二年に、東南産業を設立して法人にいたしました。昭和三十九年、宇上市に本社を移し、新工場

を作り、大川は営業所として、住宅建材メーカーとしての第一歩を踏み出しました。

しかしながら、ここまでくる間、私がデザインした化粧合板は、作っても売れず、資金操りに全く行き詰まって、三十五年には倒産寸前まで追い込まれてしまいました。

これまで、満州、シベリア、札幌の時代は、幾度か生死の試練の中に耐えてきた体験はありますが、そのときは自分一人だけであります。そのころはずでに従業員百人余りを抱えておりました。札幌時代の会社倒産を自ら経験している私にとっては、明日にも路頭に迷う従業員と、その家族のことを思うと、会社をつぶすわけにはいかないのです。この時の精神的苦痛は、事業家としての苦しみをつくづく私に教えてくれた貴重な体験となったのです。この危機を救ってくれたのが、当時肥後銀行の支店長や頭取さんでした。

昭和四十年ころから、材料の天然銘木が枯渇してまいりましたので、原木を海外に求めるべきだと考え、海外資源調査に乗り出しました。

銘木を求めて原木のあるところ、地球の果てまでも捜し歩きました。中でも南米と東南アジアには毎年のように足を運び、新しい樹種の発見とその開発に力を注いでまいりました。わが社にはそれぞれ各国の開発担当がいますが、私はいつの間にか南米担当に押し上げられた感じがいたします。ここ十五年の間に、数十回外国に足を運んでおります。中でもブラジルとポリビヤの両国では、在住日本人の多くの方々から、東家の名前を覚えていただくまでになりました。

開拓者魂

私の事業観としては、資源のない日本が一次原材料を輸入、加工して再び資源国の後進国に輸出するだけでは、後進国は失業者が多いだけにいつまでたっても問題解決にはならない。むしろ二次加工産業を資源保有国に興し、現地の原業開発に貢献しなければならぬと考えていました。

私が、そのように思い立ったのは十数年前のことですが、案の定、ポリビア政府は、原材料としての丸太の輸出を規制する法令を出しました。私の考えは多少

のずればあれの中したことになります。

その点、国際分業を早めに着手したわが社は、この不況の中でもそれだけ受ける影響面が少ないといえましょう。言ってみればわが社の強みの一面でもありません。

しかし、他社に先がけた、未知の国での企業経営に至るまでには、大きな冒険と苦勞がありました。ジャングルをかき分け、猛獣の襲来に備えて行動しなければなりません。その間何日もの野宿が続きます。原地人の案内者がいるとはいえ、危険を冒してでもやり抜くという強固な意志がなければできない行動でありません。

一番危険な場所には、トップである自分が臨まねばならない。それでなければ会社の先頭に立つ資格はない。と自らに言いきかせて未知の奥地を銘木を求めて踏破してきました。

私の開拓者魂は、満州における少年時代に培われたのだと、自らを慰めてまいりました。

無限の可能性に向かって挑戦

アフリカ、東南アジア、北米、ブラジルと各地の木材開発に飛び歩き、それぞれの国に拠点を設け、それぞれの事業を行っております。何れにしても、今日東南産業関連十一社。

中には名ばかりの社もありますが、昭和二十八年家具の表面材販売から、たった一人の私で発足し、今日二千人近い社員と、全国四十か所の営業所、事業所、海外の工場はもとより、あわせて年間、数百億の売り上げになりましたが、この実績は常に私をたすけ、かつ押し上げてくれた社員と幹部重役の協力があつたればこそその成果であります。苦勞を覚悟で今日まで汗水たらして働いてくれた社員に対して、私は尚一層の幸せを約束する義務もあるのです。

私は、物心づいて以来四十年、常に冒険を求めて、未知の世界に飛び込んでまいりました。親の目からすれば私は反逆児であり不肖の子であったことになりました。その勉強嫌いの腕白小僧が、今日、二千人近い社員と、そのご家族の生活を預かることになりましたのは、周囲の方々の温かいご支援と共に、未来に向かっ

て挑戦するという私の、幼いころからの、開拓者魂があったことをあげねばならないと思います。

私は、会社の方針として、無限の可能性に向かって挑戦という好きな言葉を掲げております。

一言付け加えておきたいと思います。経済人である私が、あえて政治への道に進む決意を固めたのは、各界、各種団体の皆様の温かい推挙によりますが、反面、政治の裏側をあまりにも知りすぎた、私の止むに止まれぬ正義感があったことも事実であります。決してガラス張りとは言いかねる現在の政治の在り方をただすために立ち上がったのであります。そのためには皆様の代弁者として、中央政治との間のパイプ役を私がつとめなければならぬという純粋な気持ちで意を決したのであります。これが政治への道に踏み切った偽りのない動機であります。五十五歳でありました。

【執筆者の横顔】

東家氏は、昭和二年、熊本県下益城郡城南町、その昔庄屋代々の家に生まれ、十五歳で満蒙開拓青少年義

勇軍に参加、渡満して訓育をうけている真最中に、日本敗戦となり、ソ連軍に逮捕連行された。

つまり、東家氏は、満蒙開拓青少年義勇軍の集団共同生活と、シベリア抑留生活の労苦、心痛などは心の奥の奥に、たたみこんでおられるらしく、自分のことはしゃべろうとはしない。

運よく引揚げたのち、農業技術員養成所を卒業、合材材の会社を興し、次に観光業、ゴルフ場などの関係企業は十指を超える。

しかし、いったんシベリア抑留者の処遇対策については、強制労働に服して地獄ながら死に直面した数回の真実を吐露し、戦時国際法の解釈を併せての論陣には、役人のさしはさむ余地のないすごい必殺に似たる言々火を吐く信念家である。

ハダカ人生五十年、という著書があるように、裸一貫からの成功で、ミニ角米とも呼ばれていた時があった。

熊本県には珍しい実業家の政界転進の政治家である。昭和五十四年、初当選以来六回当選し、その間、党

の農水副部長、党の最高機関の総務に就任、衆議院では決算委員、議運委の理事、建設委員長、政府にあっては建設政務次官、第一次宮沢内閣では、国務大臣、国土庁長官の重責を果たし、一回り更に大きくなって、その人柄のよさと実行力に富むところ、将来必ずや大を成すことを期待されている。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

北海道の実験開拓団入植より

引揚げまで

北海道 梶田 繁

昭和十七年四月、沢口作一氏が茨城県内原訓練所にて開拓団経営指導その他全般にわたり研修され、十月上旬湧別に帰郷後、第十二次北海道実験開拓団長として満州開拓入植希望者選考に入る。これより先に次男、沢口正雄氏が十七年三月大連三十里堡、大連農事株式

会社に勤めていた。翌十八年三月、父沢口作一氏と打ち合わせて満拓公社指定地へ先遣として大連三十里堡から北安省海倫県葉家堡(ハルビン)へ入地した。

現地は当時満人警察隊の居所となっていた建物で、これは元馬占山軍部の先遣駐屯地所で萬福林の居城となっていたところでもあった。

ここで満拓公社指示のもとに、家屋の買収と農地の再配分などを協議、農地は主として二耕地のみ。海倫街裡にあった満拓事務所は馬占山軍駐屯地所で、宿泊施設のある弁事所は兵舎であった。

先遣隊五戸は本隊招致と将来の経営準備のため営農に入って行った。

営農は共同作業とし馬鈴薯、燕麥、大豆、その他を現地人の応援を願い、当座の自給できるだけの畑をと懸命の耕作に入った。

しかしこの年は虫害が発生し収穫はなく、一応は満拓の協力援助を得て越冬した。

沢口団長は本隊招致のため一時帰国し、団員募集を各地に呼びかけ三十戸を募集、(先遣隊を含め)三十